

特定外来生物

緊急対策外来種

重点対策外来種

カダヤシ

学名 *Gambusia affinis*
俗称 タップミノー



北アメリカに原産の、約5センチ以下の淡水生の小魚です。マラリアを媒介する蚊の幼虫を駆除する目的で、世界各地に意図的に持ち込まれました。日本に分布するカダヤシは、1913年にアメリカから、また1916年に台湾経由で持ちこまれています。日本にはそもそも同じ生態的地位のメダカが生息しており、カダヤシの導入は必要ありませんでした。また、メダカやカダヤシがいても、蚊の幼虫が全部駆逐されることはないため、マラリアの予防にはあまり効果がありません。

カダヤシは卵胎生と言ってメスの体内で卵が孵化し、遊泳能力の高い稚魚として生まれてくるので、メダカ等の卵生の魚に比べると生存能力が上回ります。他の魚が生息できないような小さな水たまりや小川でも生きていくことができ、増水等でメスだけが1匹遠くに流されても、交尾が済んでいればそこで稚魚を産むことができます。劣悪な水辺環境でも分散、定着能力の高い種類と言えます。

水面に群れている様子はメダカにそっくりで、よく間違われます。国際自然保護連合 (IUCN) が選定した世界の侵略的外来種ワースト 100 にも選定されています。



生息環境

影響

カダヤシの定着は、日本における近年のメダカ減少の原因の一つにも挙げられています。汚染に強く、三浦半島の水辺でもいつの間にかミナミメダカがカダヤシに置き換わってしまいました。ミナミメダカの生息地にカダヤシが放流されると、ミナミメダカは極めて劣勢になり、やがて姿を消してしまいます。また、水面を覆い尽くすほど増殖することもあるため、微少な水生昆虫やプランクトンが通常以上に補食されてしまいます。

三浦半島での分布傾向

ため池や小川に生息しています。特に、作られたビオトープ池や公園の池等に見られます。流れの強い川にはいません。



駆除の方法

モンドリや小型の定置網などで簡単に採集できますが、駆除するためには水を干し上げる必要があります。ブラックバスやブルーギル等の肉食魚によってカダヤシが駆逐される場合がありますが、それではさらに深刻な状況を招きます。



採集には、小型の定置網を利用する

在来種

ミナミメダカ

在来種

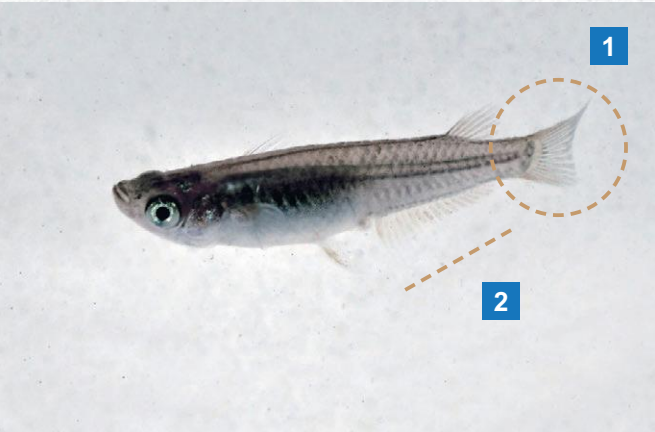
ミナミメダカは在来種ですが、三浦半島の東西や南北でそれぞれ遺伝子が若干異なります。海を越えて隣の川に移動することができないので、何百万年も隔離されていたことで独自の遺伝子が形成されているのです。買ってきたメダカを放流しないことはもちろん、三浦半島内で採集したメダカを三浦半島内の別の水辺に放流することも慎む必要があります。平作川にはメダカがたくさん生息していますが、密放流されたものだと考えられています。



Which is it?

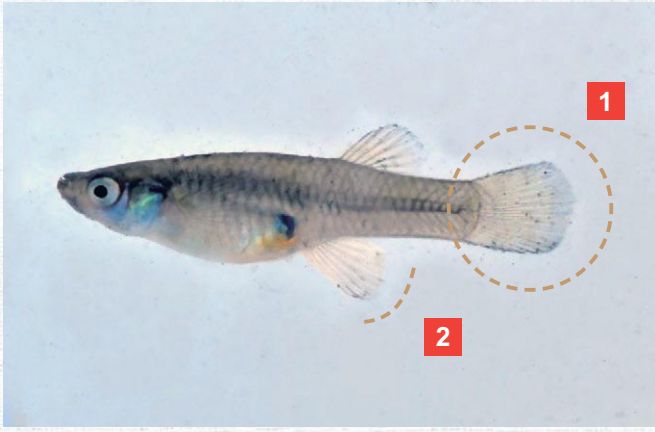
ミナミメダカとカダヤシの見分け方

ミナミメダカ



- 1 尾びれの先が直線的
- 2 尻びれの幅が広い（長さの2倍以上）

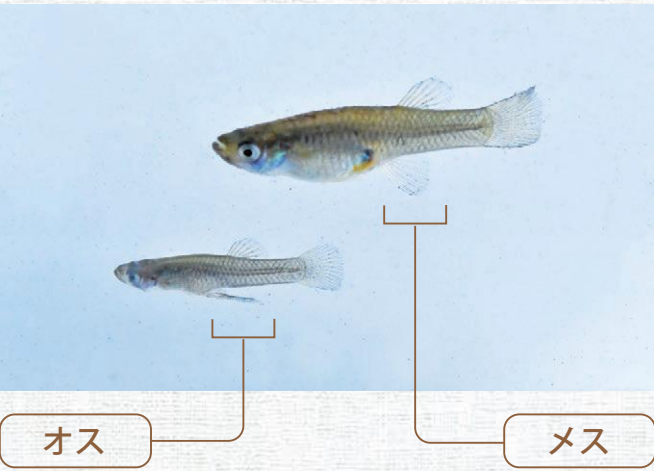
カダヤシ



- 1 尾びれの先は丸みを帯びる
- 2 尻びれの幅が狭い（長さと同程度以下）

オスとメスの見分け方

幼魚やメスの尻びれは三角形に広がりますが、オスは成熟すると尻びれが細長くとがります。カダヤシは体内受精をするため、オスは尻びれをメスに差し込んで精子の受け渡しを行うためです。



注意

カダヤシは、特定外来生物に指定され所持や運搬、放流等が禁止されているので、メダカ等と間違えて飼育してしまうと罪に問われます。駆除をする場合でも、生きた状態で運び出すことができないので、現地で殺してから運び出す必要があります。

三浦半島の場合カワセミの撮影愛好家が多く、餌付けのために小魚を撮影の都合の良い場所に生け捕りにしている事案が見られます。この餌の中にカダヤシが混入することで、各地の水辺に広がる可能性があります。

注意

所持・運搬
放流など
禁止！

よく似た外来生物

グッピー

外来種

カダヤシにそっくりなのがグッピーです。販売されているものは尾びれが非常に大きく美しい品種が多いですが、放流されるとまもなくその形態は薄れ、生存に有利なように原種に近いシンプルな形へと変化します。体側面の模様は若干残るため、識別できます。平作川でも増殖したことがあります。寒さに弱いので、温排水がない限りは三浦半島で越冬することはできません。



グッピー（メス）



グッピー（オス）

オスの尾びれは長くなる、体に鮮やかな模様が出る